植草学園短期大学研究紀要　第19－1号　39 ～ 45頁（2017）

多世代交流学習を通した地域貢献に関する考察

布施　千草[1)]　川村　博子[1)]　松井　奈美[1)]　井口ひとみ[1)]
今井　訓子[1)]　清宮　宏臣[1)]　中西　正人[1)]　山田美知代[1)]
山口　温子[2)]　根本　静雄[3)]　飯島　精三[3)]　菊入由美子[3)]

A Study of Regional Contribution through multi-generation exchange learning

FUSE Chigusa　KAWAMURA Hiroko　MATSUI Nami　IGUCHI Hitomi
IMAI Noriko　SEIMIYA Hiroomi　NAKANISHI Masato　YAMADA Michiyo
YAMAGUCHI Atsuko　NEMOTO Shizuo　IIJIMA Seizou　KIKUIRI Yumiko

本学では、「地域に根ざした介護福祉」をめざし、地域の方々と交流を深める教育環境を整え、学生に介護福祉の担い手として教養と実践力を身につけさせることを目指している。その教育の一貫として、高齢者福祉を学ぶことぶき大学校の高齢者と植草学園短期大学の学生同志の世代間の交流、異世代とのコミュニケーションをとれる人間関係力の育成を趣旨とした合同交流講座を17年間継続実施してきた。この結果を特に最近の状況を参考に、改めて地域福祉の向上・発展に貢献することについて考察する。

キーワード：拠点的福祉避難所、災害・緊急時の対応、専門力・人間力

１．はじめに

平成11年開学した当短期大学の福祉学科設立の教育方針として「特に地域福祉の向上と・発展に大きく貢献することのできる福祉のスペシャリストを養成することを目的」とすることが掲げられている。

地域介護福祉専攻では「地域に根ざした介護福祉」をめざし、いかにして地域の方々と交流を深める教育環境を整え、学生に介護福祉の担い手として教養と実践力を身につけさせるか、試行錯誤の17年間であった。

地域交流の始まりは、千葉市ことぶき大学校からの講師依頼と学生間の多世代交流学習からであった。

平成12年の開学当時のことぶき大学校の設置目的は「高齢者が社会環境の変化への適応力を養うために必要な知識や技能を修得する機会と場を提供し、もって豊かで充実生活形成に資する」であった。交流を行ったのは、短大生と同様に福祉を学ぶ福祉健康学科の大学校生である。教員と大学校生が講義を通して信頼関係を構築しながら、短大生との多世代交流学習を計画し、進めていった。17年間継続（東日本大震災年度は行わなかった）した多世代交流学習を振り返り、改めて地域福祉の向上・発展に貢献することについて考える。

２．今までの交流学習経緯

１）平成12 ～ 16年

場所：ことぶき大学校・植草学園短大。

平成16年時初めて植草学園短大で行った。

「高齢者福祉・介護への期待と願望」

多世代交流学習は、はじめは大学校生と短大学生双方が希望者を募る形で実施した。テーマは「高齢者福祉・介護への期待と願望」と案内されている。

「福祉・介護を志す若い人」との対話

介護を求める状況を想像しつつ待つ世代層の大学校生の率直な期待と願望を、それを受けて立とうとする「若い人」の構えや考え方（夢）と対峙させな

１）植草学園短期大学
２）植草学園総務課
３）ことぶき大学校

がら、これからの高齢者福祉のあり方を互いに考える機会とされていた。

大学校生の意見としては、介護されたくない。自立してもらうようなサポートを。子供に話しかけるような言葉遣いが多い。その人の目線にたってやってくれると良い。プロとしてやるにはある程度利用者との距離を置いて対応する必要があるであった。

短大生の意見としては、利用者の言い分を理解できるような介護を心がけたい。個性、趣味などを大切にした介護をしたい。今の気持ちをもったまま職に就きたい。自分を大切にしながら利用者にとってここは良いところだと思ってもらえるようにであった。

２）平成17 ～ 19年（２回ずつ実施）

双方共にクラス単位で参加となった。

場所：植草学園短大（６月）大学校（２月）

講演会・事例（ある村で起きた出来事）を通して、同世代や他世代の意見・考えを尊重しながら自他の価値観について考える。副学長の講話の後、事例検討を行った。

２月は従来の学生同士が話し合う「高齢者福祉（介護）への期待と願望」を行った。

３）平成20年（ここからは年１回に戻る）

場所：ことぶき大学校

演習「大切なものの競売」を通してお互いの価値観の違いを考えた。

４）平成21 ～ 22年

演習：「災害対応意識向上プログラム」

グループ討議を通して、災害対策意識の向上を図ると共に、高齢者と若者の交流を図った。

５）平成24年（東日本大震災の翌年）

場所：植草学園短大

テーマを「災害時要援護者への円滑な救助活動及び優先順位について」として、DVDを鑑賞後グループワークを行い、「避難支援個別計画」を作成し発表する。その後、仲間妙子氏による講演「巨大地震に備えて」と発表の講評があった。

６）平成25年

事例検討：施設に入所されている方の願いである自宅（地域）で暮らせるようになるには、どのようなサービス、助けがあれば良いか検討を行った。事例が窮地に追い込まれてすぎていて、現実なのかと悲しかったという意見があった。

７）平成26 ～ 27年

後述する平成28年と同様、夢の実現のテーマにした。

この間、ことぶき大学校の設置目的に「日頃の学習の成果をボランテイア活動にいかすなど、高齢者等の生きがいづくりと地域の活性化をはかるための学習と活動の場の提供」が加わった。学費も無料から有料へ、２年制から１年制に変化した。短大は２年制ではあるが、厚労省指定規則1500時間から1850時間に変化し、過密化している。

３．平成28年度の実施結果

3-1　実施結果概要

１）事前学習

本学習に先立ち、事前学習として、植草学園短期大学・ことぶき大学校の学生ともに、配布したＫさん（麻痺のある高齢者）の事例を読み、Ｋさんの身体状況、心理状況、生活状況を把握するために、①事例の中の専門用語や病気のことなどを調べ、②介護が必要になった人が利用できるサービスを調べ、③事例のＫさんが施設に入所した経緯や家族状況等を文章から読み取り、④事例のＫさんの気持ちを文章から読み取り、Ｋさんの「夢」とは何かを考えた。

２）植草学園短期大学・ことぶき大学校合同交流講座

平成28年７月５日（火）９：50 ～ 12：00、①高齢者福祉を学ぶ同志の世代間の交流、②異世代とのコミュニケーションをとれる人間関係力の育成を趣旨とした合同交流講座を実施した。植草学園短期大学福祉学科２年生20名、地域介護福祉専攻科生２名、計22名、ことぶき大学校福祉健康学科在校生66名、合計88名が参加した。

テーマは「Ｋさんの夢の実現のためには、どのような人々のどのような支援があればよいかを考える」とした。

講座はグループワークとして、12グループの構成とし、Ｋさんの夢の実現に向けての課題を出しあいKJ法で整理し、整理した課題に対しての必要な支援（制度・サービス・人など）、その他、話し合いで気づいたことや感じたことなどを発表した。グループディスカッション終了後、全グループの発表を行った。

3-2　学生のアンケート結果概要

１）植草学園短期大学

＜良かった点＞

ことぶき大学校との合同交流講座に関して良かった点としては、ことぶき大学校の方たちは、利用者（Kさん）と年齢が近く、利用者の気持ちになって発言していて、私たちが支援者側の立場で話していた意見と違って、様々な意見が聞けて良かった。利用者の側に立って考えられる方たちなので、こちらでは思いつかないような意見があって勉強になったとのテーマの対象者の年齢を考慮した意見が見られた。

また、いつも同じメンバーで同じ年代の人と介護過程の展開をしているので、考え方が変わらなかったり、一定の角度からしか見られなかったが、ことぶき大学校の方は年齢も上で経験もたくさんあり、普段私たちが見ない角度からの意見を述べられ、とても勉強になった。自分とかなり年の離れた方たちと一つのことに対して協力しながらやっていくというのは、良い経験になった。知識もとても豊富で、Kさんのひとつの情報に対してたくさんの意見が出てきてすごいなと思った等の意見も多く見られた。

＜反省点＞

課題としては、話し合いの時間が足りないと感じた等の時間の足りなさに関する意見がかなり見られた。

また、KJ法での話し合いは、本当はあらかじめいくつか事前に付箋紙に書いておいて、当日つけ足しや見直すという方法があったのではないかと感じた等の事前学習の時間をもう少し取ってほしいとの意見もあった。

さらに、KJ法については私たちの方が理解があって、ことぶき大学校の方に教えたり、指示をするのは少し大変だった。年上の方に何か言うのは普段あまりしないことなので、言葉選びに気を付けた、とする年配者への配慮の必要性とその対応の困難さに係る感想もあった。

＜将来役立つか＞

この交流事業について将来役に立つと思うかを尋ねた結果、「大変役立つ」と「役立つ」を合わせて60％となっていた。

２）ことぶき大学校

以下は、交流に参加した大学校生のうち60人のアンケート結果の概要である。

アンケートでは事前学習と当日の交流について設問を設けているが、ここでは当日の交流についての結果を記載する。

交流の企画についての設問では、テーマは交流の内容として適切だったかの問いに対しては70%にあたる42人が適切だったと回答しているが、交流時間についての設問ではちょうど良かったと回答した学生は33.3%にとどまり、56.7%の学生が短すぎたと感じていた（表１、２）。

表１　テーマは交流内容として適切でしたか

	度数	%
適切だった	42	70.0
改善が必要	10	16.7
どちらでもない	5	8.3
無回答	3	5.0

表２　交流の時間は適切でしたか

	度数	%
長すぎた	0	0.0
ちょうどよかった	20	33.3
短すぎた	34	56.7
無回答	1	1.7

異世代のコミュニケーションについての設問では、異世代のコミュニケーションは良好だったかの問に対して78.3%の47人が良好だったと回答している。世代の違いによる考え方・視点などの違いが理解できたかの問にできたと回答したのは66.7%の40人で、33.3%の20人はできなかったと感じていた（表３、４）。

表３　異世代のコミュニケーションは良好でしたか

	度数	%
はい	47	78.3
いいえ	11	18.3
無回答	2	3.3

表４　世代の違いによる考え方・視点などの違いが理解できましたか

	度数	%
できた	40	66.7
できなかった	20	33.3
無回答	0	0.0

交流の満足度としては、満足・やや満足が全体の88.3%を占めたが、やや不満・不満と回答した学生も６人いた（表５）。

表５　交流講座はいかがでしたか

	度数	%
満足	27	45.0
やや満足	26	43.3
やや不満	5	8.3
不満	1	1.7
無回答	1	1.7

交流の感想（自由記述）では、「若い人の考え方、加齢によるいろいろな課題の経験により、いろいろな意見交換ができ、他者の意識がわかってよかった」という、異世代の意見交換が有意義だったという感想や、「植草学園の生徒さんの真剣さと、前向きさに感心しました」といった、植草短大の学生のまじめさ、積極性に関しての感想が複数あり、また「異世代との交流の場を初体験。若さ、元気をもらった感じ」といった、交流自体が楽しかったという感想も見られた。

最も多かった感想は「時間が短すぎた」というもので、「交流の時間をもう少し長くとり、世代の違いによる考え方など、もっと深めたかった」と交流を求める様子が見受けられた。

少数ではあるが「ことぶきの学生が声高で発言が多かったせいか、植草の学生が遠慮してほとんど発言がなかった」と植草の学生の発言が少なかったことに対する意見も見られた。

発表内容についての感想は、「グループごとに、発表内容、話し合った内容（深く話し合った内容）が違い、興味深かった」という声があった一方、「Ｋさんのプロフィールがあまりにも優秀すぎて、結果がほとんど同じとなった」という感想もあった。

４．平成29年度の実施結果

4-1　実施結果概要

１）事前学習

合同交流講座の実施に先立ち、事前学習として、植草学園短期大学・ことぶき大学校の学生ともに、①参考事例を読み、②災害時要配慮者について調べ、③災害時要配慮者の訓練について考えた。資料として、事例「東日本大震災における災害時要援護者の被災事例―30代車いすの男性　身体障害者手帳１級　津波で死亡―」を事前配付した。

２）植草学園短期大学・ことぶき大学校合同交流講座

平成29年７月４日（火）９：50～12：00、①高齢者福祉を学ぶ同志の世代間の交流、②異世代とのコミュニケーションをとれる人間関係力の育成を趣旨とした合同交流講座を実施した。植草学園短期大学福祉学科２年生28名、地域介護福祉専攻科生１名、計29名、ことぶき大学校福祉健康学科在校生68名で合計97名が参加した。

テーマは「緊急・災害時の災害時要配慮者に着目した情報伝達や安否確認、避難支援、訓練について考える。」とした。

講座はグループワークとしてグループ数は12グループの構成とした。作業１として必要な支援方法の検討（①情報伝達の方法　②安否確認の方法　③避難支援の方法）について、付箋に各自で支援方法を書き、模造紙に貼付した。作業２として、災害に備えた日頃の訓練について日頃どんな訓練をしておくと実際に災害が起きた場合に役立つかを考えた。

グループディスカッション終了後、全グループの発表を行った。

4-2　学生のアンケート結果概要

１）植草学園短期大学

＜良かった点＞

合同交流講に関して良かった点としては、いろいろな年代の方と話すことで、物事に対し、新しい見方、考え方が出来ることに気が付いた。年齢層がバラバラな中で意見交換する機会はなかなかないため、とても有意義な話し合いができたと思う。これまでなかった考え方ができるようになり、成長したように思う。幅広い年齢層の方とのグループワーク

で、自分たちでは思いつかない意見が出たり、お互いの意見を尊重しながら、有意義なグループワークをすることができた。学内の話し合いでは出てこない新鮮な意見、様々な側面からの考えがあり、とてもためになる有意義な時間だった。ことぶき大学校の方々は、私たちが知らないことをたくさん知っていると感じた。幅広い年代の方とグループ活動を行うことで、教科書では学べない経験談を聞くことができ、よい体験だった等、ことぶき大学校の方々と交流するということで、大変勉強になったという感想が殆どだった。

さらに、自治会や町内会など地域との関わりをどうするべきか、考えることができた。また、実体験や家族に要配慮者がいる人の支援方法など、いろいろとエピソードを聞くことができた。ことぶき大学校のみなさんは事前に各自で調べていて、とてもたくさんの意見を聞くことができた。自分の住む地域での防災対策や、現在の状況を聞き、地域でも差があることや、理想はこうだけれど実際は…、ということもわかり、意見を交換し合えた。

世代を超えて災害時について考えることができて良かった。話し合う中で、地域間、お隣、近所同士の協力があれば、いろいろなことが楽になることがあらためてわかり、今回の授業のように交流が大切なのだと思ったとの意見もあった。

＜反省点＞

一方、課題としては、主として社会人学生から、時間が少なく、もっといろいろな話、ことぶき大学校でどんなことを学んでいるのかなど、話しができたらよかった。事前の打ち合わせがうまく機能しておらず、当日かなり混乱した。ことぶき大学校の人の発言に対して学生側からは何も言えない。役割分担について、進行役、書記、発表と役割を決めましたが、時間内で進行がうまく進まず、どの様に進めてよいかもわからず、とまどってしまった等の反省点も出された。

２）ことぶき大学校

以下は、交流に参加した大学校生のうち64人のアンケート結果の概要である。

アンケートでは事前学習と当日の交流について設問を設けているが、ここでは当日の交流についての結果を記載する。

交流の企画についての設問では、テーマは交流の内容として適切だったかの問いに対しては59.4%にあたる38人が適切だったと回答している。交流時間についての設問ではちょうど良かったと回答した学生は53.1%で、46.9%の学生が短すぎたと感じていた（表１、２）。

表１　テーマは交流内容として適切でしたか

	度数	%
適切だった	38	59.4
改善が必要	11	17.2
どちらでもない	7	10.9
無回答・その他	8	12.5

表２　交流の時間は適切でしたか

	度数	%
長すぎた	0	0.0
ちょうどよかった	34	53.1
短すぎた	30	46.9
無回答・その他	1	0.0

異世代のコミュニケーションについての設問では、異世代のコミュニケーションは良好だったかの問に対して89.1%%の57人が良好だったと回答しているが、世代の違いによる考え方・視点などの違いが理解できたかの問にできたと回答したのは64.1%の41人だった（表３、４）。

表３　異世代のコミュニケーションは良好でしたか

	度数	%
はい	57	89.1
いいえ	2	3.1
無回答・その他	5	7.8

表４　世代の違いによる考え方・視点などの違いが理解できましたか

	度数	%
できた	41	64.1
できなかった	16	25.0
無回答・その他	7	10.9

交流の満足度としては、満足・やや満足が全体の88.3%を占めたが、やや不満と回答した学生も７人

いた。（表５）。

表５　交流講座はいかがでしたか

	度数	%
満足	31	48.4
やや満足	24	37.5
やや不満	7	10.9
不満	0	0.0
無回答・その他	2	3.1

交流の感想（自由記述）では、「学生さん達も事前勉強ができていて、とても好感の持てる学生さん達だった」「学生さんの手際が良かった」という、植草短大の学生への姿勢や手際についての言及が目立ち、次いで異世代交流が有意義だったという意見が多かった。交流自体が楽しかったという意見も複数見られた。

時間が足りないという意見も複数あったが、理由として交流時間の不足と手順や流れに関して時間不足だったというものの両方があった。

発表内容については「災害時要配慮者に対する情報・伝達・安否確認訓練等、日頃から頭に入れて生活することが必要だと思った」「地域で活動している人、活動した人達の話し合いの場が欲しいと思います」など、災害時の対応について考える機会となったことが伺える感想がみられ、また同じテーマでも各班のまとめ方や見方が異なったことについての感想も複数あった。

少数ではあったが、「情報伝達の方法にのみ時間がかかり、段取り良くできなかったのが残念、生徒さん達はおとなしかった」「世代間・異世代のコミュニケーションはほとんどできなかった。グループを指揮しようとする人物の個性に大きく左右された」と進行が順調でなかったという感想もあった。

５．課題と考察

5-1　植草学園短期大学

本合同交流講座は平成26～28年度までは、「Kさんの夢の実現のためには、どのような人々のどのような支援があればよいかを考える」をテーマとして、KJ法で整理した課題に対して支援を話し合い発表した。平成29年度はテーマを変更し、「緊急・災害時の災害時要配慮者に着目した情報伝達や安否確認、避難支援、訓練について考える。」とした。

植草学園短期大学の学生にとっては、平成26～28年度までのテーマによるグループワークは学校の授業で学ぶ「介護過程」の事例を用いたアセスメントによる課題の抽出、見出した課題への支援方法の考察と目標の設定という、直前まで勉強してる学習の応用でありグループワークとして２事例を直前に学び、比較的取り組み慣れたテーマであった。

一方、平成29年度のテーマは授業では「災害・緊急時の介護」として学んではいるが、事例をグループワークとしての取り組んで考えたことはなく、前年までのテーマよりは慣れていないテーマであった。

また、教員側にとっても、平成28年度のテーマはこれまでにも経験して慣れている事例であったが、平成29年度のテーマは全く新しい事例で、事前の情報共有が十分でないという側面もあった。

このため、平成28年度、平成29年度に共通に課題として、話し合いの時間が足りないと感じた等の時間の足りなさに関する意見がかなり見られたが、平成28年度には、植草学園短期大学の学生にとって知識のあるKJ法についてことぶき大学校の方に教えたり、指示をする大変さが課題として挙げられた。年配者への配慮と教示の両立の困難さが課題とされた。

両年度ともに大部分の学生が年配のかたとの交流を通じて得るものの大きさを感想として述べていることから、今後、合同交流講座を継続する意義があると感ずる一方、取り上げるテーマと学生の授業との関連性について検討する必要があると考える。

5-2　ことぶき大学校

５月19日（平成29年度は５月18日）に開催された事前打合せ会では、主催の植草学園短期大学から、前年度の反省を踏まえて具体的な計画が示された。

その中で、第１の課題は、講座テーマと提示資料が異世代の学生たちにとって、意見交換しやすいかどうかの点（交流）と、加えて事前のグループ学習において話し合いの視点が適切に提示できているかである。同一テーマで３年目に入り、「事前学習ワークシート」を導入後年々改善され、ことぶき大

学校ではLHR（ロングホームルーム）でグループ討論された上で、交流講座に臨むことができる利点があった。ことぶき大学校にとっては、継続したテーマは取り組みやすい。しかし、29年度には最近の話題性を考慮して新しいテーマに変更された。

第２の課題は、植草短大の学生数の関係で、グループ構成で豊かな経験を持つことぶき大学校の学生数が３倍以上になることである。経験と構成数で圧倒的に発言が多くなって、ことぶき大学校生が意見交換の主役になってしまう。植草短大の学生が遠慮する傾向のグループが見られた。この点については、植草短大の先生方がグループ別に指導を担当されて、KJ法による問題解決手法を事前学習させるなどの工夫があった。その結果、若い世代からの学びが生まれ、異世代による意見交換がバランスよく、スムーズに進み有意義なものになった。これからも継続していくためにも、グループ構成をはじめ、実施時期、内容等を検討したいとの話が出された。

第３の課題は、異世代の交流を進めるための、グループの意見交換をする時間が55分間と限られてしまうことである。今回もテーマの課題解決、結果をまとめるために時間を費やしてしまうグループがほとんどであった。若い世代の考え方や見方などの違いを知らされたり、高齢化による問題へ積極的に取り組む姿が見られたりするなどの一面はあったが、高齢者福祉を学ぶ同志の交流を活かしていくための場・時間そして異世代とのコミュニケーションをとれる人間関係力を育てるためには、まだまだ挑戦していかなければならない。双方のアンケートにおいても、もう少し多く交流時間がほしいとの声が出されていた。

６．おわりに

大学における地域貢献の評価基準として短期大学基準協会によれば、「①地域社会にむけた公開講座、生涯学習授業、正規授業の解放等実施している。②地域社会の行政、商工業、教育機関及び文化団体等と交流活動を行っている。③教職員及び学生がボランテイア活動等を通じ地域に貢献している。」この三点を挙げているが、ことぶき大学校との多世代交流学習は、②にあたる。

多世代交流学習であげたテーマは、高齢者福祉、災害支援、人間理解、地域資源開発など地域の身近な問題を取り上げた。

平成28年、29年の多世代交流学習での課題は、取り上げるテーマと短大での授業の関連性の検討、またことぶき大学校のあげたテーマに関する課題は、テーマ継続と変更時の事前学習への関わりであった。

地域福祉の向上発展のためには身近な福祉問題をいかに自分達のこととして考えていけるかにかかっていると思っている。

そのような意味からすれば、テーマとして取り上げた内容は適切ではあったと思うし、アンケート結果「地域で活動している人、活動したい人達の話し合いの場がほしいと思います」「話し合う中で、地域間、お隣、近所同士の協力があれば、色々なことが楽になることがあらためて分かった」などからもそれが読み取れる。

しかしテーマ変更の際は、ことぶき大学校の事前学習について短大側が支援を行い負担軽減を図る必要があった。また、介護福祉士を目指す学生の減少に伴い、グループ構成に偏りができてきている。このようなときこそ、交流事業を開始した時のように介護職を目指す学生にエールをいただき、さらに今後の高齢者福祉のあり方を考える機会とする必要がある。

大学校、短大双方共にカリキュラム上時間がこれ以上取れないのであれば、事例検討の演習スタイルから、今まさに、世代を超えて考えるべき福祉問題について討論を行う。そのためには、テーマ選択の教員側の社会情勢を読む力、事前学習が充実するための周到な準備が必要であると思う。

参考文献

福岡県豊前市「津波避難策定計画に係るワークショップ」2014資料
黒澤貞夫他「介護職員等実務者研修テキスト」中央法規 2012
短期大学基準協会「第三者評価（認証評価）
千葉市ことぶき大学校 学生生活のしおり平成29年度
中村雅彦「あと少しの支援があれば　東日本大震災　障がい者の被災と避難の記録」ジアース教育新社　2012
植草学園短期大学「ことぶき大学校交流講座についての資料集」
植草学園短期大学「地域との交流８年間の教育の歩み」